

# 備陽史探訪 NO.9

備陽史探訪の会々報

昭和五十八年三月二十七日発行

責任者 神谷和孝

福山市西深津町一八六三一二

## 三月例会報告

担当者 種本実

テーマ 「尾道の古寺を訪ねて」

三月二十一日春分の日午前八時三十分福山駅集合。九時三分下り電車で尾道駅へ九時三十分着。途中、赤坂、松永で乗車された方々や尾道駅で合流された方々と駅北口へ集合する。総員はなんと三十人。七人の例会始り。以来の参加者である。あひにくの曇空の中をいよ

いよ出発する。例会担当者として資料は作ったものの、自身自身がよくのみ込め、つなぐ為大勢参加下された方々にどう説明しようかと、不安に胸が躍る。最初の寺持光寺には十時前に着く。幅が三・五メートル以上ある石の大門にはさすがに感嘆の声がもれた。担当者としては時間と次の目的地の二つしか考え余裕がないもので早々に足を進めようとする。会長の神谷先生が頼山の紹介と合わせて、玉蘊他、頼山陽の愛人関係についで、のさわりを話された。次は光明寺。当寺を浄土宗に改宗した道宗上人のものといわれる宝篋印塔があり、会員の宮宗さんに塔の新古の見わけ方などについて説明を聞く。内容については当会城郭研究部会発行の山城志第二巻二巻に備後に於ける宝篋印塔と題する并

川氏の論文の中に宝篋印塔の新古の区分が載つていたので、ここでは割愛させていた。

当寺に着く前頃から急に大粒の雨が降つてきた。傘をさし、民家の間の細々と続く小道を次の宝土寺へ向うのだが、私はここで本日の大失態を犯してしまった。この

うのは、光明寺に弁当を入れたカバンを置き忘れたまま宝土寺へ向う。宝土寺の次の天寧寺を立つまで分らなかつたのである。天寧寺から私のカバンを光明寺まで捜しに行き、浄土寺まで届けて下これ

三妻田氏には深く感謝することも己の不徳を取すばかりである。

宝土寺では若い人達が記念写真を撮る姿もみられた。雨さえ降らなければ尾道水道の風景も一段と良くなった。残り残念である。宝土寺から志賀重蔵の旧居を訪ねる

宝土寺よりもさらに高く眼下に尾道水道が一望できる高台に宝土寺の家は客を待つていた。とにかく、道幅が一人人が通れる程の狭さの通りに面した庭もない家である。大正元年にわづか一年程滞在した旧居に暗夜行路の苦者はどうしようもない思ひを残したのだろうか。

千光寺へ続く石段を下り線路と二号線の間を天寧寺へと歩く。二週間程前本日に備えて下見に歩いた時は、同じ道を若い女性のグループがみえたが本日は雨火のせいか、他に観光客とみえる人の姿はない。

天寧寺は境内は広く、建物も時代の年輪を感じるところ。境内左手の、元幼稚園の後に建てられた観音様を納めてある建物がある。

春の境内に異様な新鮮さを漂わせている。康成(こうあ)元(げん)年(ねん)一(いち)三(さん)八(はち)九(く)足(あ)村(むら)義(ぎ)満(まん)は(は)徹(てつ)島(じま)も(も)う(う)で(で)を(を)口(く)実(じつ)に(に)西(せい)国(こく)に(に)

した時当寺に一泊し、船から寺まで浮橋をかけさせたそうである。わずかに十才で將軍をフダ、宝町幕府の基盤を固めつつあった義満の権力をみる思ひがする。

国道沿いの歩道を東へと進む。我々備陽史探訪の会の列は天寧寺を後にした時点で大きく乱れ先頭集団は歩道橋の上でしばらく後続隊を待つという状態となった。これも例会担当者の失態である。こんな分けて時間はすでに十時四十分となり、十一時浄土寺着を厳守する為には予定していた正授院と常称寺、それに浄泉寺は寄れなくなつた。なんとか浄土寺に一同到着したのが十一時十分。かねてより神谷先生からお願ひしていただいた尾道文化財協会保護委員の財間八郎先生より、浄土寺他、尾道の古寺を中心にした講演を拝聴する。現在の浄土寺は檀家数四十と五十

家下他は全国からの信者の力が大きな支えとなつてゐること。当寺は足利尊氏ゆかりのある寺だが又リツパにも足利氏の家紋である。二引の両が付いてある。お茶をいただいたながら昼食をとる。その後本日の会費千円を徴集したり、今後の例会の予定などを協議し一時より寺の中を案内していただく。案内と説明は八十六才の御高齢とはとても思へない方からユリモアを交えた詳しい話が聞けた。さらに一般には見学が難しい収蔵庫にも入れていただいた。古文書類や絵画など多数の文化財があつたが限られた時間内であまりにも多数の品々であつた為十分頭に残せず従つて今筆を止めて脳裏をさぐつてもわずかに、お釈迦様の死ぬ前の絵とか尊氏の肖像画、尾道が港町として栄えていたころの絵ぐらひしか思ひ出せない。

浄土寺より後のスケジュールを千

光寺にまず行くことにしようかと  
 も考えたがやはり予定通り西郷寺  
 へ向う。当寺は千光寺山に建てら  
 れた尾道市美術館の屋根のモデル  
 となつた程の名建築である。靴を  
 脱いで廊下へ上る人達に次の西国  
 寺へとせきたてる。途中尾道東高  
 等学校内にある林芙美子の記念碑  
 を横目に見て細い路地をぬけるこ  
 大きなわらじがみえ西国寺へ着く  
 。石段を上りきるといつの間にか  
 雨がやんだ尾道の街並みが展望で  
 きる。三重の塔をバックに記念撮  
 影。いつまでも良い想ひ出となる  
 にちがひない。

薄日が射してきた雨上りの道を  
 大山寺へ進む。大山寺では神谷先  
 生の友人の住職の御厚意によりお  
 茶をいただいた。つづつ当寺にまつわる  
 話を聴く。ふす間に描かれた女人  
 の絵が印象に残っている。

資料に記載した日程ではさらに古寺  
 を巡る予定であったが当寺にて本日  
 の例会は解散させていただくことに  
 した。勝手ではあるがすでに四時を  
 過ぎたこと、朝からの古寺歩きで  
 内体的にも団体行動は無理では、と  
 判断したのであり御容赦いただきた  
 い。

一 本日の反省  
 一 例会担当者として勉強不足であ  
 り、た為折角の休日でも悪天候にも  
 かかわらず御参加いただいた方々に  
 十分な説明ができず大変申し分けな  
 く思いました。本日を教訓として  
 一層の厂史学習に励み次の機会によ  
 りよい例会を御案内させていただきます  
 ます。

会長の神谷先生、副会長の田口氏  
 をはじめ会員の皆様と本日御参加  
 いただいた方々の御協力を深く感謝  
 いたします。

三月二十六日記